

島田 典明（しまだ・のりあき） 島原市立第一中学校3年  
作品名 十五歳、死を考える  
読んだ作品 『生き上手 死に上手』

「生き上手死に上手」この見慣れない不思議な言葉に惹かれ、僕はこの本を手に取りました。生きることには上手とは何だろう。同じように、死ぬことには上手とは何だろう。まったく見当がつかないこの言葉の意味を楽しみに、僕はこの本を読み始めます。

この本は遠藤周作さんの実にたくさんの考えが綴られたエッセイでした。遠藤周作さんの「ものの見方」や、思ったこと感じたことをとてもユーモラスに、かつ、深く語っているところにとっても楽しみながら読むことができました。

例えば医学について触れられた話では、西洋医学だけでなくほかの医学も大事にするべきだという意見や、治療だけでなく患者の心を大事にしてほしいとねがう意見が書かれていて、これってかなり普及していることだと正直今さら感を感じました。不思議に思ってた調べると、この本が出版されたのはなんと約三十年前。そんなにも前から現代につながる意見を言っていたということにとっても驚き、今さらなどと言っていた自分の愚かさを恥じました。先見の明が鋭く、頭が切れる。ただ、やさしくてユーモアがあるというだけの人ではないと、改めて凄味と感動で震えました。

また基督教や仏教といった宗教の考え方に触れたお話もあり、宗教に関心がない僕にとって、とても興味深いお話でした。特に、遠藤周作さんが信仰しておられる基督教と、日本に強く根付いている仏教の似ている考えや異なる部分について述べられた文章では、宗教に少し苦手意識がある僕ですが、新しい考え、新しい見方に抵抗なく触れることができました。

なかでも感銘を受けたのはやはり、題名にもなっている生き上手死に上手についての話です。本書を読み終えた今、遠藤周作さんの言葉を借りながら改めてこの言葉の意味を自分なりに解釈してみました。まず考えやすかった「死に上手」とは、これは、穏やかに死を迎えるということだと思えます。このことは遠藤周作さんが明言しており、死に上手に至るために死に稽古が必要だとも言われています。しかし、中学生である僕にとって「死」という考え方は遠く、こういうことだろうと試みてみたはいいものの、腑に落ちませんでした。そこで、おばあちゃんに「死ぬのは怖い？」と聞いてみました。するとあっけらかんと「怖くなくだよ」と返ってきました。加えて「自分が一生懸命生きて、今楽しく過ごしている。これが大事。今それができとるけん怖くなくだよ」といいました。この言葉、特に一生懸命に「生きる」という部分のおかげで、少しは納得しました。一生懸命に生きるということは中学生でも実践できるからこそ、漠然とした死に対する考え方に対して、少しだけ輪郭が見えたような気がしました。それでも、この考え方がわかるようになるには時間の助けが必要だなと途方もない気がします。

次に「生き上手」とは、これは、たくさんのご経験をそれぞれを、自分のものにしてい

く。自分にとってプラスのものに変えていくことだと思います。先ほどの説明で言った一生懸命に生きるということではないことに驚きですが、よく考えるとつながっているけれど、確かに違うものでした。作中で、遠藤周作さんは三年に及ぶ闘病生活について後悔したというようなことを一切言っていない。むしろトクをしたとまで言っています。その上で「過去のマイナスに見えるようなことでもいつかはプラスに転ずる」という言葉を残しており、僕はこの言葉にすごく共感します。なぜなら、これに似た考えを僕も持っているからです。僕の今までの経験の中で、マイナスと呼べるものがあります。それは、生徒会に入ったことです。生徒会自体が嫌いというわけではないけれど自分がするとなると話は別です。中学三年生、ただでさえ忙しくなるのに、生徒会の仕事までしろと言われてたら。僕には時間を取れるという感覚のほうが強くて心底嫌でした。結果的に生徒会には入りませんでした。いまだに時間を取られているという感覚が消えません。しかしその中で「全てのことは無駄じゃない」という言葉はただの綺麗事としか思えないけれど、「全てのことを利用することはできる」という考えにたどり着きました。確かに、生徒会の仕事は嫌いだけど、ほかの面白い生徒会メンバーといるのは楽しいし、ほかの生徒はしらない立場で行事を見れるし、入試に役立つし、利用して自分のものにするにはできるのだと思います。そしてこれが、一生懸命に生きるということに繋がると思う。

僕は「死に上手」を目指すために「生き上手」になりたい。そのために、この本で得た知見を今後の生活に生かしていきたい。